



TITLE:

世界戦後の地名考(三)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 世界戦後の地名考(三). 地球 1933, 20(1): 67-74

ISSUE DATE:

1933-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184173>

RIGHT:

世界戦後の地名考 (三)

瀧 川 規 一

アーブ・シムベル (Abu-simbel)。又はイブサ
ムブル (Ipsambul) と云ふ。埃及ナイル河の左岸
ヌビア (Nubia) にある。一地方である。ワデー・
ハルファ (Wady Halfa) 町から北四〇哩、河流に
よればコロスコ (Korosko) の南五六哩の距離に
ある。ラムシース (Rameses) 二世 (紀元前一二
五〇年頃) の岩窟寺があるので有名である。主
なる殿堂はシーチ (Seti) 一世 (紀元前一三〇〇
年頃) 及び其子によつて建造完成された。河岸
の砂岩の岩壁に切り刻んで造られてゐる。太陽
神を祭る殿堂は最大にして奥行一八五呎ある。
岩壁を切り削つて殿堂入口の正面を作り入口の
左右には各一對の巨像が玉座に坐してゐる。巨
像の高さ五六呎であつて岩に切り刻んだ像とし

ては埃及最大のものである。この岩窟寺の殿堂
は一八一二年バークハルト (Burkhardt) の發見
にかかり一八一七年ベルツォニ (Belzoni) によ
つて公開されるやうになつた。河より直に階段
を登れば前庭に達し入口に至る。内部の最初の
室は八柱を有する大廣間であり岩壁に多數の着
色彫刻がありラムシース王の武勳を表現してゐ
る。リリカ (Lyrica) リゴア (Libya) 及びエシオ
ピア (Ethiopia) に於ける戦争を記録しカデッ
シュ (Kadesh) に於てヒッタイト (Hittites) 族及
び其同盟軍と戦ひラムシース王自ら奮戦して埃
及軍を救つた記録などを記録してゐる。大廣間
の次には同じく支柱を有する小室があり次には
控室があり次に聖堂がある。聖堂内にはアメン

ラ (Amenra) ラムシース (Rameses) メムフィス (Memphis) ラハラク (Raharakht) の四神の像がある。最初の大廣間から入り得る室が横に入つある。これ等の室は東向なるが故に戸を開くと太陽が東から聖堂まで光をさし込むやうに出来てゐる。南方の二體の巨像には時代は遙か後であるプサメチカス (Psammetichus) 二世 (594—589 B. C.) に屬したらしく思へる希臘人、カリヤ人、及びフェニキア人の軍人の名が刻されてある。これによつて斯る太古に於て既に埃及軍中に希臘人の傭兵のあつたことを知るのみならずアルファベットの初期の形の研究者にはよい資料である。

小さな方の殿堂は女神ハーンソル (Hathor) を祭り入口の左右には四體の立像があり高さ三三呎である。入口より廣間に入り廊下によつて二室と聖堂に入る。内部の四壁には彫刻がある。巨像中二體はラムシースであり二體は皇后ネフェール (Nefere) を表はしてゐると云はれて居る。

アイブ・テラル (Abu Telul) 。パレスタイン (Palestine) にある戰場。一九一八年七月十四日土其古軍はジェリコ (Jericho) 町の東及び北に當る地點でジョルダン (Jordan) 河の兩岸に於てアレンビ (Allenby) 將軍統率の英軍に對し攻勢をとり午前三時半突如ワヂ・アウジャ (Wady Ajja) 附近でジョルダン河の西にあるアイブ・テラルを襲撃し、二時間以内に濠洲軍の輕騎兵隊 (Austrian Light Horse) の爲めに反撃され大損害を被つて退却した。第二回目の攻勢も亦土其古軍の失敗に終つた。

アフチン (Abtig) 又は Abutij 又は Abutizh) 。上埃及 (Upper Egypt) にあるコプト (Copt) 人の都會。アシウト (Assiut) 町の東南一五哩の處にあつてナイル河畔にある。附近には岩石を以て墳墓とせる古跡があるので有名である。人口一萬餘。

アバイドス (Abydos) 。又はアバイダス (

Abydos)。小亞細亞にある古都。ヘレスポント (Hellasport) 即ち近代のダーダネルズ (Dardanelles) 海峡の最狭部にある都會であり、バルカン半島側にあるセストス (Sestos) 町と相對してゐる。アバイダスには模範青年と呼ばれたリアンダ (Leander) が居つたが、對岸のセストスにはヴィナスの神に奉仕せる美貌の若き尼僧ヒーロ (Hero) が居つた。リアンダはヒーロに會ふ爲めにヘレスポントの海峡を毎晩泳ぎ渡つたが、或る冬の夜遂にリアンダは溺死してその屍體がヒーロの住む塔の波打ち際に漂着した。これを見たヒーロは塔の胸壁から身を投げ、愛人の身邊で死んだと云ふ古典の悲詩がある。

波斯王ザクシス (Xerxes) が紀元前四八〇年に希臘に遠征をなせる間、軍隊を歐洲に輸送する爲めにアバイダスからボートを連結して橋となした。今日の工兵隊の架する繫船架橋の基源として有名である。また近代に於ては英詩人バイロン (Byron 1788—1824) が「アバイダスの花嫁」

(The Bride of Abydos) と題する詩を作り、この地の戀愛悲歌を作つたので知られてゐる。バイロンの詩の筋では、チアファ (Giaffr) と云ふ總督にズレイカ (Zuleika) と云ふ娘があり、未だ一度も見ないことなうカラスマン (Karassman) と云ふ青年知事に父の命によつて強制的に花嫁にせられた。娘は己の悲愁を愛する弟のシーリム (Selim) に打ちあけた。すると弟なりと思つてゐたシーリムは實は弟に非らずして従兄弟であり、ズレイカの父の爲めに殺された父の弟の子であることをシーリムの告白によつて知つた。シーリムは更に自らは海賊の長であるから海賊に加はれと女にすすめた。兩人が語り合つてゐる處へ總督はサーベルを振り廻はして兩人に切りかかり、シーリムは殺され、ズレイカは悲嘆の餘り死ぬのである。

アバイドス (Abydos)。 上埃及ナイル河の左岸近くにある古都であり、カイロ (Cairo) から三五〇哩南にある。傳説的に埃及人はオシリス (

Osiris)の神の頭がこの地に埋葬されてゐると信じこの地を聖骨陵と云つてゐる。墓地は幾世紀の間埃及諸王の遺骸を葬つて居り、有史以來の埃及の最初の國王ミニス(Menes)の墳墓もこのうちにある。實に紀元前四四五年と云ふ太古の墳墓である。シーチ(Seiti)一世は此處に大殿堂を建立した。希臘の地理學者ストレーボ(Strabo, C. 63 B.C.)はこの殿堂をメムノネイオン(Memnoneion)と云つたことは有名な話である。殿堂内には諸王の名表がありこれを「アバイダスの表」(the Table of Abydos)と普通に稱へて居る。またラムシース二世の第十三男のミネプタ(Mineptah)が紀元前一三〇〇年頃に建てた大會堂がありオリシスの神の神秘的儀式に用ひられたと云はれてゐる。

アビス(Abyss)。**基督敎時代の猶太人が死人惡靈及び神に叛いた靈の居所として考へた地下の大甕。後世には地下甕を刑罰の場所として用ひられた。**

アルプスの雪山の割目の深きものをもアビスと云ひ大洋の最深部も亦アビスと云ふ。太平洋大西洋に於ては三千尋以上の深部があり比島群島附近にはミンダナオ(Mindanao)島近くに五、三四八尋の深部がある。米國コロラド(Colorado)の大溪谷も亦アビスであり其のうち或るものは一哩の深さを有してゐる。アルプス山脈中のペンニン(Pennine)山脈にある石灰岩の山には地壺(Pot-hole)として知られてゐる何百呎の深淵がある。

アビシニア(Abyssinia)。**アビシニアは古來よりの地名。今日の官稱はエシオピア(Ethiopia)東北アフリカにある獨立帝國である。面積約三十五萬平方哩、人口約八百萬。全人口を四大別に分つ。南部及西南部に住む人間をガラ(Galla)と云ひ全人口の半分を占め、中部地方に居るものをショア(Shoa)と云ひ古來統治者を出してゐる種族である。北部を占むるものはチグレ(Tigre)と云ふ。東部を占めてゐる種族はダナキ**

リ (Danakili) 又はアフアル (Afar) と云ひ回教徒である。

アビシニアの統治者は舊譯聖書に書かれてゐるイスラエイル (Israel) の第三次の國王ソロモン (Solomon 紀元前九三七年頃死歿) とその皇后シェバ (Sheba) との間に生れたメネリーク (Menelek) の後裔なりと稱してゐる。住民は猶太人及び埃及に於ける希臘系の王朝プトレミイ (Ptolemy) 家 (紀元前二八三年以前より紀元前四七年頃) との密接なる關係がある。六世紀以後回教徒の勢盛となるに至つて諸外國との關係を絶つた。十五世紀に葡國の旅行者が入國した時は國內は數州の獨立王國に分裂してゐた。其後の三世紀間はチグレ王國、アムハラ (Amhara) 王國、シオア王國が互ひに覇を爭ひ争鬭が絶えなかつた。然しその間大體に於てアムハラ國は優勢であつた。一八〇五年英人ヴァレンチア卿 (Lord Valentia) ヘルンツ・ソント (Henry Salt) の統率の下に傳道者が入國して以來續々英人は

入國した。一八六八年アムハラ王シオドア (Theodore) 三世が英人に侮辱を受けたと想像し英國官吏を逮捕した。これが爲めに英國はサー・ローバート・ネーピア (Sir Robert Napier) 統率の下に遠征軍を送り、戰敗の責を負うてアムハラ國王シオドアは自刃した。

シオドアの自殺後チグレ國王が後を襲うてエシオピア全部の國王となつたが一八八九年亦戰死したのでシオア國の前統治者の子が全國の皇帝となりメネリーク二世と稱した。

メネリーク二世は叡智の君主であつて國內の擾亂を鎮めエシオピアの獨立を維持した。皇帝は一九一三年に崩去された。皇帝と並び稱して才幹を稱へられた皇后タイツ (Taïou) も、間もなく一九一八年に崩去された。皇帝メネリーク二世の後繼者としてその次女の息子であるリー・ヤス (Lij Yasu) が王位に即じた。リー・ヤスは土其古に同情した廉で一九一六年に王位を強ひられ、メネリーク二世の長女の娘ザンデツ (

Zanditu)が女帝として王位に登つた。同時にラス・タファリ(Ras Tafari)が攝政となり且つ後嗣として定められた。然るに女帝と攝政との間に確執が起り遂に攝政が一九二八年十月に皇帝の位に即いて漸く紛擾が治まつた。一九二三年にはアビシニアは國際聯盟加入國となつた。

アビシニアは周圍に歐洲列強の屬領がある。既に列強は勢力範圍の争を醸し始めてゐた。アビシニアは直接關係を有するこれ等の列強と協約を結ぶことによつて漸く國境問題を解決し國內の政狀を安定することが出来た。其條約の最重要なるものは一八九六年に締結された伊太利との條約である。一九〇六年十二月十三日には英佛伊三國はアビシニアの領土保全を協定した。恰も三匹の猛獸が一疋の羊を犯さぬことを約束したのと等しい。

アビシニアは牧畜業と農業との國である。綿珈琲及び砂糖を産し森林は硬質の黒檀・ホガニその他の硬材を産するが、鑛石に富む地質を有

するに拘らず採金を除いて他の鑛業が發達してゐない。主府はアデス・アベバ(Addis Abbaba)と云ひ鐵道は佛領ソマリランド(Somaliland)のジブチ(jibuti)港に達する佛・鐵道(French-Ethiopian Rly)がありこれによつて主要なる貿易が行はれ國家の主要收入となつてゐる。國內の主要なる都會は主府の他にハラール(Harar)ゴンダー(Gondar)及びゴゴ(Gogo)がある。一九二八年には伊國は紅海(the Red Sea)に出る港を作るべき土地をアビシニアに與へた。

英文豪サムエル・ジョンソン(Samuel Johnson 一七〇九—一八四)が母の葬式の費用を辨ずる爲めに一週間の晩を費して書いたと云はれてゐる哲學小説ラセラス(Rasselas)はアビシニアの皇子(Prince of Abyssinia)の話を書てゐる。皇子は幸福の谷(Happy Valley)に住し快樂と慰安の變化に乏しきに飽き埃及まで國を出奔された。幸福がどこかで見出さるべきものだと思つてゐた皇子は何處にもこれを見出し得ず遂にも

とのアビシニアに歸つたと云ふ話である。本誌の小牧氏のアビシニア訪問記は今昔を比較して面白い讀物である。

アケーチア(Acadia)。又はアケーヂ(Acadie) 今日北米大陸カナダにあるノーヴァ・スコチア(Nova Scotia)の舊名。一六〇四年佛人によつてファンヂ灣(the Bay of Fundy)に面した土地に初めて殖民せられた佛領殖民地であつた。アケーヂの名は一六〇三年頃からこれ等の佛人によつて稱へられた。然るにゼイムス(James)一世(1566—1625)の時代に英人によつて奪取された。當時英國より送られた殖民は蘇格蘭人が大部分を占めてゐたので佛蘭西名を改めてノーヴァ・スコチア(新蘇國)と稱した。其後再び佛蘭西人はこれを奪還したが遂に一七一三年ユートレヒト(Utrecht)條約によつて公式に佛國から英國に讓渡された。英領となるや英政府は佛人を國外に放逐した。佛人の或るものはカナダに移住した。或るものはルイジアナ(Louisiana)に農

場を求めて去つた。アケーチアは米詩人ロンゲフェロ(Longfellow 1807—82)の詩イヴァンヂリーン(Evangeline)によつて農民の悲しき戀物語の傳へられてゐる處である。

アクラ(Acera又はAkka) 西部アフリカにあるブリチッシュ・コースト・コロニ(British Coast Colony)の海港にして首府。一八五〇年以來英領となる。一八七六年以來首府となり知事を置かる。海港ケーブ・コースト(Cape Coast)の東八〇哩。タフォ(Tato)まで六五哩の間は鐵道があり、一九一四年以來クマン(Kumasi)に至る鐵道布設の測量を始められ既に開通してゐる。信號所があり電信局があり無電局がある。其他燈臺、銀行及び競馬場があり、アングリカン教會がある。港としては碇泊所がなく陸上げはサーフ・ボート(surf boat)と稱せられる激浪乗切りの堅牢なボートを用ひてゐる。主なる輸出品は砂金、棕櫚油、象牙、ゴムの加工品及び原料、木材である。人口は三萬八千餘。地方の言語は土着の黒

人の使用するアクラ語であるが、ガーン(G)と
アダムピ(Adampi)の二方言に別れてゐる(未完)

新著紹介

○日本鳥瞰圖

第四輯 西村健二著 東京尚柳原

東京都成館發行 昭和八年五月 一組三圓五〇錢

日本鳥瞰圖は一昨年來發刊され地理教課用として重寶がられて居たが今其の第四輯の續刊を見るに到つた。收められた圖葉は青森縣鰺ヶ澤の四段の段丘を有つ隆起海岸、關東平野に君臨する紫の筑波山、海波に洗はれる犬吠岬と洋々たる利根川の河口とを含む銚子半島、木曾御嶽火山並に温泉火山を中心にした島原半島の五枚である。鳥瞰圖の特色は山岳の皺を見せるにあるが平坦地を伴ふものでは視角によつて山貌が圖中に著しく現はれなくなる。例へば筑波の如き視角を變へたなら圖に著しい焦點が出来ることとなる。地形によつて鳥瞰の視角を選ぶ必要があると思ふ。それにしてもこの新しき五葉は火山以外の地形が多く既刊のものを補ふと共に日本に於ける地形圖集の完成に近づきつゝあるは喜びに堪へぬ所である。(中村)

○青丘雜記

安倍能成著 岩波書店發行 定價二圓

著者は京城大學教授であるが、朝鮮へ赴任されてからの隨

筆私記を集めたものである、同時に勿論著者は地理學者ではない。しかし本書によつて我々は朝鮮や滿洲や、支那さては耽羅島などの風物について深く廣く教へられる點が多い。蓋し文化の發達といふことを心掛けて篇中至る所にその哲學的思索の結果を洩らされてゐるので普通漫然たる旅行記とちがつて、興行もふかく、開口も廣い、さうして讀後に東洋の人文現象に關しての何物かを暗示させられるといふ喜びがある日本を愛し朝鮮や滿洲の文化をしらんとする人士には是非とも一讀せられんことをすすめる。(藤川)

○アラスカ日記

矢部茂著 古今書院發行
定價一圓八十錢

著者矢部氏は北滿金鐵開發の技術的研究のため滿鐵の社命をうけ、昨年七月から十二月へかけて、アラスカに旅行したさうして本日記は七月三十日のシャトル出發からはじめて、八月十四日ノームについた飛行機旅行や滞在の間に見た紀行である。正直に云つて筆者は近頃これ程面白い有益な紀行文に接したことがないので一讀巻を描くことが出来ず、何回もくりかへした、挿繪も豊富であり、文章も亦極めて明快である。ノームの町に居るハレー齊藤といふ日本人の洋食店があるらしいが、其の店の主人齊藤といふ人の痛快な活動を教えられて極北の曠野に働ける同胞の氣慨に感心させられたのみでなく、本書は各地で著者の經驗した異域の人の同情は、之を聞くだけでも心地がよい。筆者は全く本書に魅せられて